高尾山報 令和4年4月号 毎月1回発行 通巻第699号

# 高尾山報

令和4年4月号

高尾山火渡り祭厳修 三月十三日 於・自動車祈祷殿大広場

# 法の水茎

大正大学講師　髙橋秀城

(118)

今月四月六日、満開に咲き誇る桜花のもと、大本山高尾山薬王院中興第三十三世、佐藤秀仁御貫首の晋山式が執り行われました。この度は誠におめでたく、ますますのご加護とご繁栄を心よりお祈り申し上げます。

我が宿に
咲ける桜の
花ざかり
千とせ見るとも
飽かじとぞ思

（『拾遺集』平兼盛）

（我が家に咲いた桜の花盛りは、たとえ千年もの間見続けたとしても、きっと飽き足りないと思うよ）

季節は春爛漫を迎えました。辺り一面に、やわらかな陽光が満ちあふれ、にぎやかな鳥のさえずりも聞こえてきます。高尾山の桜も、中腹の薬王院から山頂のヤマザクラへと進んでいるでしょうか。季節の移ろいは、過去から現在、そしておそらく未来にわたって繰り返されますが、今目の前にある花盛りは「二度とないこの瞬間だけ」の光景です。

花に染む
心のいかで
残りけん
捨て果ててきと
思ふ我が身に

（西行『山家集』）

（花を思い続ける心がどうして残ってしまったのだろう。出家をして世を捨ててきたはずの身であるのに）

桜に心惹かれるのは、今も昔も変わりません。この歌を詠んだ西行法師（一一一八～一一九〇）は、前号でも取り上げたように、生涯にわたって桜の花をこよなく愛しました。この世の執着（束縛）を離れて、思い切って俗世間から飛び出した西行でしたが、見た目は「墨染衣」（僧侶の衣服）を身に纏っていても、心は春の「桜衣」に包まれていたのでしょうか。僧侶としての「捨てた身」と、一人の人間としての「染む心」の隔たりに思い悩んでいるかのようです。

今回は、こうした「身」をめぐる布施行について書いてみたいと思います。「無財の七施」の四つ目は「身施」という教えです。「身施」は別名を「捨身施」と呼ぶように、「自分の身体を他に奉仕する」という意味です。

「身施」について、『雑宝蔵経』というお経には「父母・師長・沙門・婆羅門に、起ちて迎え礼拝す」と見えます。「礼拝」は、合掌したり跪いたりして拝む作法です。相手を敬う気持ちを、まずは行動や態度に示すのが大切なのでしょう。

お釈迦様も前世において、雪山童子として自らの身を羅刹に与えたり（「捨身羅刹」の物語）、兎としての身体を食料として捧げたり（「月の兎」伝説）といった「捨身の行」を行いました（『法の水茎』8・72）。施身童子とも称されるお釈迦様の、身体をなげうってまでの修行には及ばなくても、周りのために身を尽くすのは、仏教の基本となる行いです。

ちなみに先ほどのお経には、こうした「身施」の実践によって、遠い未来には「尼拘陀樹」（「尼拘律樹」「バニヤン」とも）という樹木のように敬われるようになるという果報（良い報い）も説かれています。この木は、地中で枝葉を整えること百年、地上に芽を出すと一日にして生じ、その高さは頂が見えないほどの百丈（約三百メートル）にも及ぶそうです。仏教では、お釈迦様が悟りを開いた菩提樹とともに、尊い道場樹として崇められる植物です。

「身施」をめぐる話に、次のようなものがあります。

今は昔。持統天皇（六四五～七〇三）という女帝の御代に、中納言大神高市麿（六五七～七〇六）という人がいました。生まれつき心が素直で、あらゆる智恵を持っていました。漢詩文を学び、いろいろな学芸にも通じていたため、天皇はこの高市麿に国の仕事を任せました。

ある年のこと、国中が大干ばつに襲われました。すると高市麿は、自分の田の水の取り入れ口をふさいで、一般民衆の田に水を入れさせました。水を人に施したので、自分の田は干からびてしまいました。

高市麿には、自分を捨てて他を哀れむ心がありました。これにより天の神は感心し、龍神に雨を降らせました。真心が天に届いて、お助けくださったのです。

故に、人は正しい心を持つべきです。決して道に外れた心を抱いてはいけません。

（『今昔物語集』）

仏教では、他人のために尽くすことを「利他」と言います。自分の「身を捨てて」でも周りの幸せを願った高市麿の「身施」は、まさに「利他行」そのものと言えるでしょう。そしてそれは、心の奥底にある「正直さ」から生み出されたとき、さらに力強い効力を生み出すのです。

悲心を一人に
施さば
功徳大なること
地の如し
己が為に一切に
施さば
報を得ること
芥子の如し

（『大丈夫論』）

（慈悲の心で一人にでも施せば、その恵みは大地のように大きい。自分のためだけに施せば、その報いは芥子粒のように小さい）

桜の花の優美さは、大地の下に、しっかりと根を這わせているからこそ生まれるのです。私たち人間も、目には見えない内奥の「気根」（仏さまの教えを発揮する力）を養いつつ、自らの花を開かせていきましょう。

（栃木北部教区普濟寺）

春を迎え多くの草花が咲き誇る



## 総本山智積院 傳法灌頂 当山貫首臨監

三月六日、真言宗智山派総本山智積院において、布施浄慧化主猊下が真言宗長者に就任されたことを祝す、傳法灌頂開白法要が執り行われました。

法要では、昨年十一月に厳修された傳法大会に引き続き、大本山成田山新勝寺の岸田照泰御貫首が総裁を、大本山川崎大師平間寺の藤田隆乗御貫首と共に、当山の佐藤秀仁貫首が副総裁を務められました。傳法大会と傳法灌頂を合わせて、傳法両大会と呼ばれております。

傳法灌頂は、真言密教の奥義を伝授するための儀式です。この法会で奥義を授かった僧は、正式な真言密教の僧侶と認められます。

前列に並ぶ布施猊下と三山の御貫首

## 春彼岸先師墓地参り

三月二十一日

国土安穏・疫病終息祈願

# 高尾山火渡り祭

三月十三日　於・自動車祈祷殿大広場

諸願成就を祈り浄火を素足で踏みしめる、
火生三昧「火渡りの儀」

人々の願いをご本尊様へ届けるため
山伏が撫木を火中に投ずる

燃え盛る柴燈護摩壇を囲む山伏たちの読経は周囲に響き渡っていく

火を渡り御加持を授かる

阿字門より道場に入る佐藤貫首

勇壮な湯加持

道場内の魔を滅する宝剣の儀

海外の方も大勢火を渡りました

山伏さんと一緒に火を渡ります

熱くても頑張るの!

# 高尾山年代記 28

## 歴代山主の事跡をたどる

明治大学博物館　外山　徹

## 十四世秀永5　御影供の執行

享保四年三月二二日は、西暦では一七一九年五月一〇日となる。新緑の若葉がまぶしい時節、その日は晴天が期待されたが、生憎の雨模様であった。

**御影供の風景**

その日、高尾山では札所や寄進を受け付ける奉加所、おみくじが用意され、飯縄宮と薬師堂には番をする係が配置されていた。三月二二日は真言宗の宗祖弘法大師空海の命日であり、各地の真言宗寺院では大師の肖像を掲げての追善供養―「御影供」が執行されていた。

享保元年からしばらくの間書き継がれた「年々諸用記」という帳面には、元年の月ごとの「参銭」額を書き上げた箇所がある。参銭とは賽銭のことか詳細は不明ながら、参詣者が喜捨した銭貨であろう。月ごとの額面を比較すると三月が突出して多い。それだけ参詣者の多かったことが推測されるが、それはこの御影供の執行に係わっているのだろう。実際、麓の村の旧家の日記には「おびただしき高尾参り」（享保一八年）といった御影供の日の賑いがたびたび記されることになる。

弘法大師空海御影

「年々諸用記」によると、この日は二四名の者が「御宮番」「御くじ」「奉加所」「薬師堂」「御札処」「惣廻り役」「御取次」「御給仕人」「寺内惣奉行」「料理人」「参詣案番」などの配置に付いているが、予想される大勢の参詣客に応対するためだろう。この人員の内、「御くじ」の心教以外は俗人が務めており、料理人と参詣案番の五名以外の一八名は全て苗字を名乗る者である。

江戸後期には寺務をつかさどる役として寺侍の存在がわかっており、近隣の檀家の中からも、八王子千人同心や駒木野の関所番の家の子弟が寺侍として出仕していた。ここでの人名は、同時期の寺中人別改には見あたらないが、苗字からして近隣の素封家の子弟と推測され、臨時の人手として手伝いに出ていたようだ。

**供養結衆**

「年々諸用記」には供養執行の際の「役配」についても記されている。

**正御影供役配**

**一、伝供　心立　一、祭文　円心　一、唱礼　倫貞房**
**一、表白　金南寺　一、唄　師　他方院　一、散花　安養寺　一、錫杖　金泉寺　一、梵音　栄心　一、調声　前讃　栄心　一、後賛　秀山　高楽寺　一、回向　当院**

最後の「当院」は高尾山主秀永のことである。秀永を中心に二名の僧侶が堂内に着座して執行する様子が浮かぶ。ちなみに翌年付の寺中人別改の記載から後の一五世を継ぐ倫貞（賢秀・三九才[注1]）と、心立（心隆）二六才、円心二六才、秀山二一才の若き弟子僧らが結衆を勤めていたことがわかる。栄心は人別改に見えないので間もなく転出したのかもしれない。

寺院の名は門末寺院で、金南寺（上長房村・西浅川町）、安養寺（上椚田村・高尾町）、高楽寺（下椚田村・狭間町）といった近在の三ヶ寺と金泉寺（相模国高座郡下九沢村・相模原市緑区下九沢）が名を連ねている[注2]。

関東地方の真言宗寺院において、御影供が重要行事として執行されていたことは、江戸時代の早い時期から確認できる。特に、幕府のキリスト教取締りに発する宗門改制度によって村落寺院が数多く開創され、本寺・末寺関係が編成されていく過程において、一門の結集を儀礼的に再確認する重要な場となっていた事例がある。



享保のこの段階の高尾山で門末一同が勢ぞろいしたものか、上記の寺院以外の末寺・門徒の参列は不明ではある。役配の寺院の門末内の序列からすると、前述の儀礼的色彩は希薄なようだ。むしろ、この頃には檀家や参詣者を意識した祭事としての性格が強くなっていたのではないか。なお、江戸後期の記録では、末寺・門徒の住僧の一部が恒常的に寺務に出仕している事例が見られ、また、時の山主と門末住職との師弟関係なども関係しているかもしれない。

「年々諸用記」に記された御影供の役人附

**御影供から春季大祭へ**

さて、リアルタイムの史料にある貴重な記録ではあるが、判明することは以上に述べた程度である。そこで、御影供の様相を記した後世の記事も拾ってみよう。

先に述べた旧家の日記では、延享四年（一七四七）の記事に「終になき高尾参りござそうろう」ともあり、同様の記述は一八世紀後半にかけてたびたび見え、大勢の参詣者で賑わう祭事であったことがわかる。

江戸後期になると地誌にも記述が見え、『武蔵名勝図会』（文政三年・一八二〇）は次のように記す。

**例年三月二十一日は大師の御影供会。この日はまた飯縄神祭礼として十二座神楽ならびに法楽あり。翌二十二日大般若執行。この両日近郷遠里より参詣群衆せり。**

この頃には飯縄大権現の祭礼も同日におこなわれ、神楽や法楽などが執行される、大勢の参詣者を集めた賑々しい行事となっていたことが記されている。

旧家の日記では「御影供」という表現は文政八年（一八二五）まで確認できる。以降も三月二二日に高尾山へ登った記述があるので、引き続き祭事が執行されていたことは確実だが、記載はやがて「祭礼」という表記となってゆく。

明治を迎え、一三年（一八九〇）に執行された居開帳の折、四月二二日に「例年の通り玄関より行列せり、また稚子は八王子町三富の周旋にて四人登山の事」と、現在の春季大祭を思わせる行事の記載がある。『高尾山誌』（昭和二年・一九二七）は四月二二日の行事を「御影供会」とし、翌二三日の大般若執行も記しており、この四月の行事が江戸期の御影供を継承するものであることを示している。

新暦の三月二二日はまだ肌寒い時期でもあり、旧暦の時候に合わせて月を動かしたのであろう。先の日記では明治二〇年に四月二二日の祭礼が確認できるが、新暦切り替えは明治六年からなので、時期はさらにさかのぼる可能性がある。農業が主たる生業であった時代、ちょうど田植えを目前としたタイミングに執行されていたわけだが、現在の春季大祭は四月の第三日曜である。稚児行列の保護者に勤労者が増え、その便宜を図り、昭和四五年（一九七〇）から日曜の執行となった。

うららかな春の日差しの下、盛大に催される祭事は、時代をさかのぼれば、宗祖弘法大師を追善する供養に行きつくのである。

**註1**　年齢は享保四年時点、数え年である。

**註2**　「他方院」は「多宝院」のことだが、薬王院の門末としては確認できていない。

**おことわり**　本連載では史料の引用について、読みやすく原文に手を加えています。

# いけばなの心 ㉖

華道教授　佐藤　宗明

今回生けた作品は『燕子花』を使用した生花正風体です。燕子花は尾形光琳の屏風にも燕子花図が描かれ、古くから日本人に親しまれている草木です。

燕子花の花の盛りは五月～六月ですが池坊では古来、冬にもまれに花を咲かせるため、四季咲きの草木として扱われています。

今回は若々しい若草色の葉を多く使い、春に葉を出し、やっと花を咲かせた燕子花の風情をイメージして生けてみました。花は生花正風体では陽の光が差し込むとされる左奥と、大地からの生命の兆し、蕾に秘めた力強さを感じさせる正面下段に配置しています。

池坊をやっていると燕子花を扱う機会が圧倒的に多くなります。それは季節とともに移り変わる燕子花に花の美しさだけではない、常に移りゆく美しさを感じたからではないでしょうか。

花材：燕子花

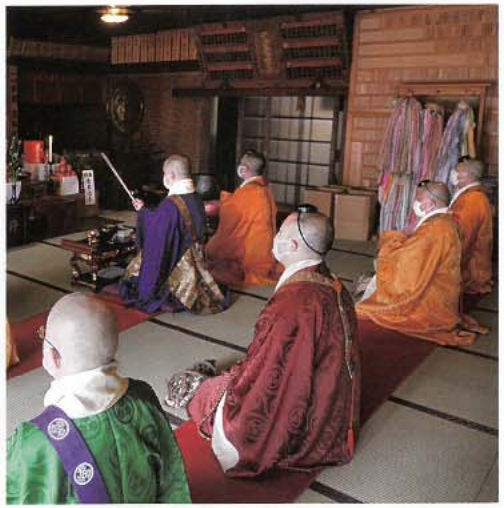
## 東日本大震災追悼法要厳修

三月十一日(金)

東日本大震災発生から本年で十一年を迎えた三月十一日、高尾山上において「東日本大震災追悼法要」が営まれました。

午後二時の御護摩修行の後に、地震が発生した午後二時四十六分に合わせ、大本堂の慈照観音前において、僧侶と共に参列の皆が鎮魂と、被災地の更なる復興促進、また被災地にて暮らす方々の安全を祈る一時となりました。

その後、犠牲者名簿が納められている、有喜苑の東日本大震災物故者供養塔において、未曽有の大津波や震災に関連して命を落とされた方々の、ご冥福をお祈り致しました。



犠牲者の鎮魂と被災地の復興をお祈りしました



# 高尾山物語 ㊽

## 広庭天狗像

絵・橋本豊治

**天狗の団扇**

大天狗は団扇を携えております。これは、一生懸命に努力して生きている人達の祈りに応じて、そのお力で災厄を祓い、幸福を招くためのもので、高尾山では「開運の天狗団扇」と呼んでおります。

四天王門をくぐると、右手に大天狗と小天狗の尊像が見えてきます。

この尊像は、平成十七年(二〇〇五)四月に、俊源大徳による高尾山中興六百三十年の記念として、大勢の御信徒様による御志納を賜り建立されました。

また周囲を囲む玉垣は、平成二十年(二〇〇八)に関東鳶職連合会より、創立五十周年記念事業として御奉納頂きました。

天狗は飯縄大権現様の眷属であり、神通力により除災開運、災厄消除、招運来福など、衆生救済の利益を施すとされたことから、天狗伝説や天狗信仰が根付き、神格化されています。

また、高尾山は修験道根本道場であり、山伏が深山幽谷に籠もって難行苦行を重ね、やがて高尾山の霊気と融合して、呪力、験力を体得して大先達となることから、山伏の姿が天狗と同一視されることもあります。

# いろは天狗の落し文 ⑮

**よ**　良き種まけば豊かな実り　人生同じことといえる

良き種とは、善行とも言い換えられます。善因善果悪因悪果という言葉にもありますように、善行を積み重ねることで、やがて幸福、良い結果が訪れることでしょう。

実り多き人生を送るためにも、ただ漫然と生活を送るのではなく、本を読んだり、旅行に出かけて見聞を広めたり、友人から多くを学ぶなど、日々の研鑽を重ねてみましょう。

# 観音菩薩の宗教 52

国際教養大学特任教授　金岡秀郎

## 観音菩薩の転生者としての聖徳太子（その15）

聖徳太子は前世のみならず未来をも予言したとされ、後世の『太子伝』などにおいては、自らの来世の転生者の名称を挙げたり、遷都などの未来の出来事を予測したりしている。その予言は『未来記』として小野大臣（小野妹子）などによって記録されたと伝えられ、例えば江戸時代の寛文期の『太子伝』にははっきりと『未来記』の書名が見えている（「観音菩薩の宗教」㊿）。太子による『未来記』の書名はすでに鎌倉時代の文保期（一三一七～一八）の『聖徳太子伝』に「太子五歳の未来記の御ことばすこしもさらにたがはざりけり」などと複数回に亘って現れている（小峯和明『中世の予言書』岩波新書、二〇〇七年）。それらは太子の『未来記』が存すると信じる人々へのひとつの根拠となっている。

これまで学問的な研究が少なかった『未来記』であるが、中世文学の研究者である小峯和明は、上記の他、『邪馬台詩の謎―歴史叙述としての未来記』（岩波書店、二〇〇三年）、『予言文学の語る中世』（吉川弘文館、二〇一九年）等によって、その解明に大きな業績をあげている。今号以下ではそれらに基づきつつ、聖徳太子に仮託された『未来記』について考察したい。

日本において未来を予言する文献は数多く存する。未来予知の起源をたどれば、仏典におけるる授記とか記別に遡ることができる。授記とはブッダが将来、成仏することを弟子や衆生に語ることで、『法華経』の「授記品」や「薬王品」などを通じて理解・信仰されてきた。例えば、

「我が滅度の後、後の五百歳の中に閻浮堤において広宣流布して、断絶せしむることなけん（私が入滅したのち五百年後の人間世界で法華経の教えを広め、仏法を絶えさせることがないだろう）」（「薬王品」二十三）などはその典型である。

日本の『未来記』も、『法華経』の記別や授記の予言を意識していたと推定され、人々は仏や神のごとき絶対者の予言に未来を託したとされる（『予言文学の語る中世』）。中世にいたると多くの『未来記』と称する文献が「どこからともなく」（同前）現れてきた。ある場合には誰かによって地中から発見されたなどとして、この世に忽然と出現する。

出自不明でありながら大きな影響力を持ったチベットのテルマ（gter ma 埋蔵経典）も、霊感のあるテルトゥン（gter ston）と呼ばれる人物により地中から発見されたと宣言された。こうした不可思議な出現は、人々に神秘性を与えるに重要な要素のひとつとして機能した。日本を含め、英訳などを通じ各国で広く読まれた『チベット死者の書』（川崎信定訳、ちくま学芸文庫、一九八九年）もテルマのひとつで、密教僧のパドマサンバヴァが著し地中に埋めたものが発見されたと信ぜられてきた。死後四十九日間の体験という超常的世界を記した『死者の書』が、出現においても神秘的であったことは、その宗教的価値を高める

野馬台詩図。『野馬台詩図解』
早稲田大学図書館蔵
（小峯和明『邪馬台詩の謎』より）



ことに貢献したであろう。

こうした意味で、日本の『未来記』の「発見」もまた、真偽に関する近代的な疑義を超えて、当時の人々に有意に受け入れられた。

聖徳太子によるとされる『未来記』に先立ち世に現れたのは、『邪馬台詩』と名付けられた漢詩である。この詩は五言二十四句の短いもので、近世には「やばたいし」「やまたいし」と訓があるが、中世には「やまとし」と読まれたと推定され、それは日本の古称「やまと」と関連付けて解釈されていた（小峯和明『邪馬台詩の謎―歴史叙述としての未来記』）。『邪馬台詩』の漢字はばらばらに並べ替えられ、そのままでは読めないように書かれている。「それが神仏の示現によって、中心の『東』の文字から始まって、じぐざぐにたど（同）るなどという方法で解読された。その内容は、現代人には牽強付会、こじつけと思えるものの、日本の終末を予言するものと解釈され拡散した。例えば、「百王、流れ畢ごとく竭きて」の一節を日本は百代目の天皇で滅びるという終末観として捉えられたりした（同）。

『邪馬台詩』がどこでだれによって作られたか、またいかなる目的で作られたのか確実なことは不明であるが、日本で一般化したのは、八世紀に吉備真備が遣唐使として唐に渡ったさいこれを入手し、長谷観音や住吉神の力添えで解読して請来したとする説である（小峯『中世日本の予言書』など）。吉備真備は『吉備大臣入唐絵巻』に描かれたごとく唐の皇帝に怖れられるほどの異才を示したが、『邪馬台詩』の解読だけは単独でできなかった。観音菩薩と住吉神が吉備真備の読解を助けたことは、観音菩薩と神道の習合を示すとともに、「邪馬台詩」の成立と観音菩薩との関係を暗示するものである。日本では延暦九年（七九〇）にはすでに『邪馬台詩』の注釈が作られ、この時代には「中国での文脈を離れ」、日本の未来を語る『未来記』として捉えられていたとされる（『邪馬台詩の謎―歴史叙述としての未来記』）。

日本では『邪馬台詩』の作者について中国南北朝時代の梁の高僧・宝誌和尚（四一八～五一四）とするのが一般的である。宝誌和尚は梁の武帝の信を受けた実在の高僧であるが、早くから伝説化され、梁を滅亡させた侯景の乱を予言するなどの讖言で尊崇の対象となっていた。予言を能くする人物が生来の奇瑞を具えていることは、宝誌が鳥の巣で卵から生まれ手足の爪が鳥であったとする伝承や（小峯『中世日本の予言書』）、その伝記が『梁高僧伝』の「神異」に記されていることからも示唆される。しかしそれらに加えて日本における後世の文脈で重要なのは、宝誌が観音の化身と信ぜられてきたことである。

日本では九世紀の『延暦僧録』に宝誌が十一面観音の化身とする記述が見られほか、円仁の『入唐求法巡礼行記』は「誌公和上（＝宝誌。金岡注）は是十一面菩薩の化身なり」と記すなど、複数の文献に宝誌観音化身説が述べられている。なかでも鎌倉期成立とされる『宇治拾遺物語』第一〇七話には、王が複数の絵師に宝誌の肖像を描かせたさい、宝誌が自らの額を切り裂くと中から真の姿である観音菩薩が現れたとするエピソードが見える（同）。その強烈な表現は、ビジュアライズされ、さらにインパクトを与えるものとなった。京都の浄土宗・西往寺所蔵で京都国立博物館に寄託された宝誌の木造像（重文）は、額中央から下顎まで縦にぱっくりと割れた顔面の中にもう一つの顔が彫り込まれ、一般的な慈悲相の仏像からは想像できぬ異様な像容を示している。筆者も二〇一三年に東京国立博物館で催された「大神社展」においてその像を実見したが、写真からは伝わらぬ怖れにも近い衝撃を受けた。近年ではこの像は神道の神の本地として観音菩薩が出てくるとする解釈もある（東京国立博物館『国宝 大神社展』図録、二〇一三年）が、像が僧形であることや、上記文献との共通性を考えれば、宝誌和尚とすることを否定する証拠は見出しがたい。

日本では宝誌和尚が来日したとする伝承も生まれ、中世神道書には宝誌が観音菩薩を本地とする天照大神を尊崇する記述も見られる（小峯『中世日本の予言書』）。詳細不明の漢詩が宝誌作の予言書とされ、観音信仰や神祇信仰と習合して、同じく観音菩薩の化身たる聖徳太子の『未来記』なる書に引き継がれていく。これについては次号に見たい。

恩師・菊地正先生に学ぶ(2)

創作書おろし

# 蛙の恩返し

とんとん健康散歩の会　石井忠明

高尾山麓不動院の蛙股

とんとん昔、しとしと雨降る梅雨時のことじゃった。薄汚れた衣を着た坊さまが小さな庵を造るために、山里の家からもらった材木を大八車に載せて、運んでたそうな。

ある日のことじゃった。今日も材木を貰い庵を造っていると、庵の近くの畦道でずぶ濡れになった悪餓鬼共がな、蛙をとっ捕まえて遊んでいたんだと。

「ケンよぉ、麦の穂を取って来いよ」

「どおすんだよぉ」

「まぁ見てろ、蛙の尻の穴に麦の穂をちょん切って突っ込んむんだよ、そんでよ、息をプーと吹くんだ、ほれパンパンに膨らんだんべぇ、これで一巻の終わりよ」

「康っちゃんよう、蛙が死にそうだよ」

それを見ていた坊さまがすっ飛んできてなぁ、

「おいおい、こんな惨いことをすると蛙の罰が当るぞ、そうさのう、麦飯の握り飯だけどほれ、三つある。これとその蛙と代えてくれぬか」

餓鬼共は、握り飯を見ると蛙をほったらかしにして、坊さまから引ったくるように貰って帰っていったと。

坊さまは

「なんと、可哀相なことをするなぁ、今助けてやるからな」

泥水の中にひっくり返っている蛙を頭陀袋に入れ、造っている庵の側の池にそっと放してやったと。

「ほれ、もう大丈夫だ、この池で養生するがいい、元気になったらな、大きな声で三回ゲロゲロと鳴きなせい、死ぬでねぇぞ、元気で会えたら権太と呼ぶかのぉ」

蛙は、やっと動けるようになった手足で水を掻きながら、水連の花が咲く池の中へ消えていったと。

ところで坊さまは、庵を一人で造っているので、思うように捗らず難儀をしているところへ、何時ぞやの餓鬼が訪ねてきたんだと。

「お前達、何しに来たんじゃ」

「うん、坊様、蛙に悪さしてから二人の手が腫れてボツボツが出てきたんだ。おっ母に見せたら、蛙に小便引っ掛けられたんだんべぇ、悪さばかりしているから罰が当ったんだ、って言うんでどうしたらいいだぁ」

「そうさのう、庵造りを手伝ってくれるなら」治し方を教えるんだが」

「手伝う手伝う」

「それじゃあ、おっ母さんにドクダミを煎じてもらい、毎日飲むと良い、よいな」

「嫌だけどわかった」

そして二人は、暇さえあると坊さまの仕事を一生懸命手伝ったと。

そしたらな、忽ちボツボツは消えたって。そして庵も大分出来上がってきたと。じゃがのぉ、横木(虹梁)と屋根の間を支える物が出来ず困り果てていたと。するとなぁ、水連の葉の上で蛙が、ゲロゲロと三回鳴いているでねぇかぁ。坊さまが手を休めて振り返ってみると、あの時の権太蛙ではねぇか。

「おや権太か、立派になって私を覚えていなすったか」

すると、権太は坊さまの耳元で囁いたそうな。

「坊さま、お困りになっている支えのことなんでやんすが、私っしにお任せ下さいまし。助けていただいたお礼でやんす。但し三日待っておくんなさい。」

坊さまはなぁ、蛙が人の言葉を喋ったので、ぶっ魂消てなぁ、地べたに座り込んでしまったんだと。そして我に返った坊さまはな、池の方を見ると蛙の姿はなく、水連の葉に綺麗な水玉だけが光っていたと。

蛙の権太は早速池に潜って仲間にお願いしたと。

「己等一生のお願えだ、己等を助けてくれた坊さまが庵を一人で立てているんで難渋しているだぁ。だから皆の手足を貸してほしいんだよ」

「判った、夜になったら皆を集めてくるべぇ」

次の日の夜、子の刻も過ぎた頃じゃった。すると四方から来るわ来るわ、池は見る間に蛙で溢れ返ったと。そしてなぁ、三日目の丑の刻の時じゃった、権太は最後の願いを蛙達に言ったそうな。

「己等をあの横木まで乗せて欲しいんじゃ」

蛙達は庵の柱の根元に集まり、蛙の背中の上に次から次へと登り、高い蛙梯子になったと。

「おーい権太、もう登れるぞ」

「ありがとう、のぼるぞぉ」

権太は蛙の背中を借りながら上へ上へと登り、横木の真中まで来たと。

その時、権太は思い切り息を吸い始めたと。するとみるみる内にでっかくなり、横木にぴったり収まったんじゃと。

権太蛙は手伝ってくれた蛙衆に厚くお礼を言うと、大きな声でゲロゲロと三度鳴くと、それっきり動かなくなったと。

三日目の朝、坊さまはいつものように庵の屋根の仕事に取り掛かろうと于横木の方を見上げたその時じゃった。坊さまは「あー」と叫んで大粒の涙を流しながら言ったと。

「そうだったのか、ありがとう。権太のお陰で確りとした庵になった。これからお前の名前が残るように『蛙股』と呼ぶことにしよう。ありがとう」

ところで、『蛙股』という名前の支えは、昔からお寺や神社の建物に使用され、今でも全国で見ることが出来ます。

とんとん昔はへぇしまい

## 折り折りの記 (152)

### 口遊みたくなるような落椿

波多野　重雄

高尾山の琵琶滝路の急峻な山を下りる時、土手下に落椿が壁により添い落ち、花を真上に向けたまま立並ぶ姿は人の手を借りた様に壮観である。

地上に落下した順に花は上を向き、咲き誇る姿は滅多に見られない。数日後登山の折、又落椿を見ると花は、雨に濡れ生き生きとして道辺に照り並んでいた。

天上の樹に咲く椿、落下して蘇るように地上に咲き照る姿は、高尾山が生み出す自然現象である。落下の椿の花に戯れる小鳥らの声は、登山者の汗を乾かす瞬時の楽しみを誘う。

(高尾山健康登山の会会長)

## 十八本山参籠(6)

### 春参籠　総本山醍醐寺

厚木市　荒井　一雄

朝梵　櫻花散
登拝　上醍醐
深祈　准胝佛
詣諸　堂求朱

太閤の
夜桜の夢
思ひ下る

春、総本山醍醐寺に参籠る

早朝のお勤めに桜花散る…
上醍醐寺を登り拝す…
准胝観音(如来)様を
深く祈る…
山上の諸堂を参詣し
ご朱印を求む…

## 高尾山　季節散歩

暦の言葉　「七十二候」

### 霜止出苗

「しもやみてなえいずる」

四月二十五日～四月二十九日頃

この時期になると、夜間に冷え込まなくなり、植物の大敵である霜が降りなくなります。

そのため様々な農作物が成長し、田植えの準備もはじまります。実りの秋を目指して、忙しくなってきますが、心弾む時期です。

今月の風物詩

### 桜海老（さくらえび）

桜色に輝く姿から、「海の宝石」とも呼ばれております。

国内の桜エビの水揚げは、ほとんどが駿河湾です。また、資源保護のため、漁期は制限されており、三月中旬～六月初旬、十月下旬～十二月下旬のみとなります。

生で食べたり、釜揚げや、かき揚げにして食されます。

## 一歩一歩煩悩滅除

百八の階段を昇り、悩みや煩い事を取り除きましょう

三段　成功への近道はなし

「学問に王道なし」という言葉があります。この王道とは、容易で特別な手段という意味を持ちます。学問だけでなく、何事にも特別な道など無いと理解して、成功のためには不断の努力を続けることが必要なのです。

### 『高尾山健康登山の証』のお勧め

年間約二百八十万人の人々が訪れ、「世界一登山者の多い山」として知られている高尾山。

登山者の皆様の励みになれば、との思いから平成十一年から健康登山を始め、今では約五万人の方々が会員となられております。

期限はございませんので、御自分のペースでお楽しみ下さい。

また、一冊に付き二十一回スタンプを押すページがあり、終了したことを満行と言います。満行されますとお祝い膳として精進料理の御接待や、健康登山者限定の記念品などと交換もできます。

帳面……七百円
スタンプ……百円

健康登山者投稿作品

## 季節の絵手紙

「春の足音」

八王子市　栃谷　玲子

「3つの心」

3つの心

1. 感謝の心
   大自然の恵み 家庭や国の恩恵などに対する感謝の心
2. 思いやりの心
   相手の立場に立って考える 自分を反省したり相手を許す謙虚さ 周囲に奉仕する深いやさしさ
3. 自立の心
   夢や志に向かって主体性を持って生きようとする自立の心



## 都内唯一の養蚕農家　長田誠一様来山

二月二十八日、養蚕業を営む、長田誠一様御夫妻（八王子市在住）が、お参りに訪れました。

長田家は先祖代々養蚕農家を続けられております。かつて八王子には、多くの養蚕農家がありましたが、現在では八王子のみならず都内唯一の養蚕農家となりました。

また、長田家には江戸時代に高尾山で授与されていた、当時の「養蚕守護」の御札が現在まで残されております。

この御札は八王子市が日本遺産として認定を受けた「霊気満山　高尾山」の構成文化財の一つに選ばれております。

今回の御参詣に際し、本年も新たな養蚕守護の御札を、佐藤貫首より授与されました。

長田様は小学校などで講師を務め、人の手を介してしか生きることのできない蚕の飼育を通し、命の大切さを伝え続けております。

養蚕守護の御札を授与された長田様御夫妻

## 厄年を過ぎた御信徒の皆様へ

六十才の厄年を過ぎたなら
一年・一年を
七十才を過ぎたなら
暑さ、寒さを
八十才を過ぎたなら
春夏秋冬を
九十才を過ぎたなら
一日・一日を
気を付けられ
日々を大切に
圓満にお暮し下さい

当山では皆様の（身体健全 寿命長久）を祈念して

**福壽圓満**の御護摩をお申し受け致しております。

## 院内散歩 61

～薬王院の展示物～

書画「おくのほそ道　敦賀～大垣」松尾芭蕉　　作・小田嶋十黄

# 御護摩修行のおすすめ

## 皆様の諸願成就を祈願する

高尾山では大本堂に於いて、毎日御護摩修行をお勤めしております。

御護摩修行とは、護摩木という特別な薪を大導師が御護摩の炎の中に投入し、あらゆる煩悩を焼き浄めるために行われます。そして、御信徒の皆様の祈りが御本尊に届けられ、皆様の諸願が成就するという修行であります。

御護摩修行を行った方には、御護摩札が授与されます。

大切にお持ち帰り頂き、御供物と共に清浄な場所に奉安礼拝して、一心に御宝号「南無飯縄大権現」とお唱え下さい。

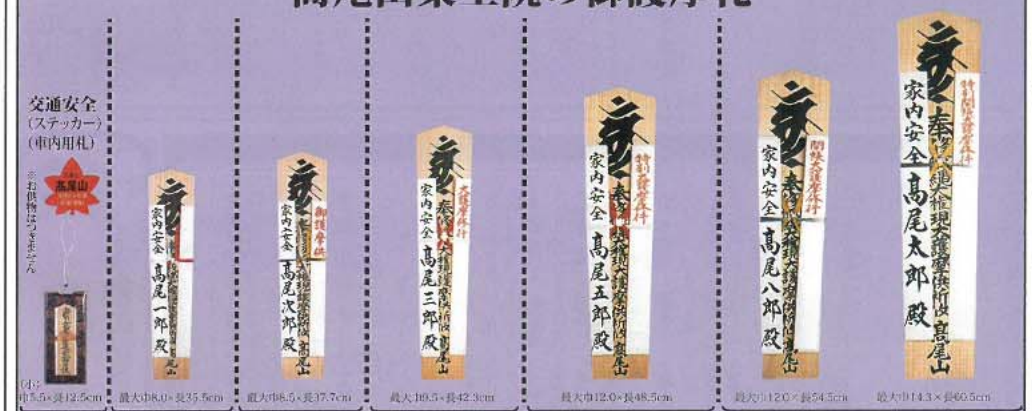
### 苗木奉納

古来より高尾山の御信徒は、自分のお願いが成就した時に感謝とお礼の意味を込めて、苗木を奉納する習慣があります。今日でも、お杉苗奉納は続いており、参道の大杉原には、杉苗奉納者の芳名板が、板塀のように並んでおります。

高尾山では寺法において「殺生禁断」を第一義に、むやみに草木を切ることを厳しく戒めてきました。私達は信仰心と共に大自然を守り、また大自然から守られつつ共存共栄し、今日の景観を造りあげてきたということを、忘れてはならないと思います。

尚、毎年**十二月十日**までに、**一万円以上**を御奉納頂いた方のお名前を、翌年より掲示させて頂いております。

## 高尾山薬王院の御護摩札




| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| (大) 10,000円<br>(中) 5,000円<br>(小) 3,000円 | お護摩<br>3,000円以上 | お護摩<br>5,000円以上 | お護摩<br>10,000円以上 | 特別大護摩<br>30,000円以上 | 開帳大護摩<br>50,000円以上 | 特別開帳大護摩<br>100,000円以上 |

| | |
|---|---|
| 家内安全(家) | 商業繁昌(商) |
| 事業繁栄(事) | 交通安全 車内用札(車・交) |
| 交通安全 神棚用木札(木・交) | 身上安全(身) |
| 災難消除(災) | 厄除(厄) |
| 身体健全(体) | 当病平愈(病) |
| 開運(開) | 良縁成就(縁) |
| 安産成就(安) | 入学成就(入) |
| 心願成就(心) | 御礼(礼) |
| 奉納杉苗(杉) | |

**お護摩の願事**

お願い事は一体一願意とします。

併願(二願意)は一万円より受け賜ります。

但し、五千円で家内安全と商売繁昌のみ併願とさせて頂きます。

お護摩札には年令・生年月日等は入りません。

(一)内の略字をお書き下さい。



# 高尾山仏舎利塔

## 結縁牌懸仏(かけぼとけ)のおすすめ

高尾山にはタイ王国・王室より授けられた、大聖釈尊の真身骨を奉安してある仏舎利塔があります。そしてその周りを囲むように建立された百観音お砂踏霊場がございます。

御信徒各位には、釈尊との御勝縁を結ばれますよう、仏舎利塔内に結縁牌懸仏（かけぼとけ）をご納仏されることをお勧め申し上げます。

この結縁牌懸仏は、夫々のご家族の先祖代々供養の為に、あるいは講中、参拝団の物故者慰霊の為に、お釈迦様と御信徒の皆様との尊いご結縁のしるしとして、霊名あるいは施主のご芳名を刻み、仏舎利塔内壁面に奉安し、大聖釈尊の聖骨と共に幾久しく供養されるものであります。

御納仏冥加料

一体　拾万円也

尚、お申し込みの方には「御納仏回向之証」をお授け致します。（左の写真）

# 高尾山の昆虫

## アカシジミ

150

シジミチョウの仲間で、ミドリシジミ亜科の種は金属光沢の強い緑色を帯びることが知られ、その美しさからも愛好家が多いです。

同じミドリシジミ亜科の中で、アカシジミ属のチョウは緑系とはまたひと味違う趣があり愛らしさを感じます。

今回取り上げたアカシジミ(赤小灰蝶)は雌雄共にオレンジ色を帯び、後翅の末端には細長い尾状突起を備えます。光の当たり方ではより赤味が映えて、アカシジミの名に相応しい雰囲気を持っていると感じられます。

本種はクヌギ、コナラ、カシワ等の多い雑木林でよく見られ、日中は木の葉に止まりじっとしていることが多く活動は不活発ですが、早朝や夕刻に樹の梢で活発に舞い、なわばりを主張するような行動が見られます。

なかなか下に降りて来ないため、飛んでいる姿だけでは近縁種のウラナミアカシジミと紛らわしいですが、時に撮影可能な葉に止まっていることも少なくなく、翅裏を見せて他種との違いをアピールしているようにも思えます。

（文 松島　孝　撮影 上村　雅昭）

おはなし散歩道

源作爺と仙太(4)

# 花まつり

湯沢町　富樫　あい子

源作爺の住む山奥にも遅い春が来た。

庭先にカタクリや山スミレが咲き、川のせせらぎの音が春を告げている。

今日は花まつりだ。

ここでは爺が暑い時期に甘茶の葉を摘み、手もみをして発酵させる。その茶葉を天日干しにした甘茶をタヌキの仙太や森の動物達と一緒に今年の豊作を祈り、無病息災、災害が起こらないように祈る日が花まつりなのだ。

朝、東の山あいに太陽が昇る。雲が薄紫に染まる頃タヌキの仙太が来た。

「爺、フキノトウだ。こごみもウルイも採れたぞ」

爺は籠を覗き込み、

「春の香りだのぉ。今夜の酒はうまいぞ！」

爺は、ニコッとして仙太の肩を叩いた。

「子ダヌキ達はつくしを摘んでいた。爺のつくしご飯は最高だとよ～」

「そうか。作ってやるぞ」

ハハハ～　二人の和やかな笑い声が山の隅々まで届いている。森に住むリスや子ダヌキ、小鳥たちも花まつりの舞台作りに一生懸命だ。爺も春野菜の料理に大わらわだ。

「甘茶をたっぷり沸かして皆に振る舞ってくれ！」

「承知したぜ！」

威勢のいい返事だ。

仙太もねじり鉢巻きで張り切っている。

爺の庭先に花舞台が出来た。そこへ熊がハチミツを、リスがクルミや木の実を、うさぎが農家の人が秋に取り残したキャベツやニンジンなど沢山持ってきた。メジロ、ウグイス、ヒバリなどが山野草を摘んで会場をさらに飾っている。爺は驚いた。

「立派な舞台じゃ！さぁ料理を運んでくれ」

爺の料理と甘茶が振る舞われる頃、西の空がオレンジ色に染まった。

「素晴らしい夕日じゃ」

「みんなで祈ろう！」

仙太の掛け声に森の動物たちは甘茶を捧げて、無病息災、豊年満作、無災害を祈念し、それぞれが踊りだした。小鳥の合唱に庭先のお花も春風に揺れている。

「森には、沢山子ども達がいる。幸せだのぉ～」

しみじみ爺は言う。

「ワシもだ。一人ぼっちのタヌキのオレを分け隔てなく、爺は受け入れてくれた感謝しかない」

「何を言うか。倅になってくれたじゃないか！」

仙太は爺の手を握った。

「今日は子タヌキ達と腹ヅツミを打って踊るぞ！」

「仙太の腹ヅツミは聞いたことがなかったなぁ」

爺と仙太はいつものように酒を酌み交わした。

「腹ツヅミの音が響くように腹一杯食べてくれ」

♪ポンポン　ポコポン！

♪ポンポコ　ポンポン！

スズメたちがどこからか飛んで来て踊り出した。

フクロウが目覚めた。

♪ホ～ホ～　ミミズクも、

リスは木の実をカチカチ鳴らした。熊はタヌキの真似して腹ヅツミを打つが音が出ない。ハハ～

「愉快だ！　愉快だ！」

爺も仙太も酔が回ると踊り出した。森に住む動物達が一つになって楽しんでいる。夜空に、ほのかに朧月が浮かんでいる。

「皆に話したい事がある」

仙太が突然切り出した。

「昔、家族は鉄砲に撃たれて死んだ。俺は人間を恨んだ。しかし爺はワシを信頼してくれた。今日、森の仲間が心を合わせて花まつりを盛り上げている姿に感動した！」

仙太の目が潤んでいた。

「身を守るために化け術を使ってきたが花まつりを期に、この森に化け術はいらない。返納だ！」

「おぉ～　いいのか？」

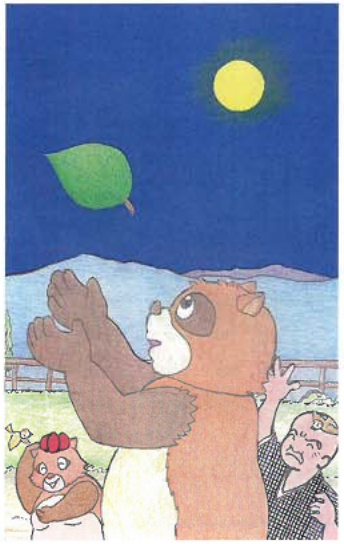
皆、驚きの眼である。

「人間らしく、タヌキらしく生きて行こう・・・」

源作爺がぽつりと言う。

仙太は術の「木の葉」を夜空に放した。木の葉は谷間へと消えて行った。

（終わり）



（挿し絵・小出　茂）



第百十九回

# 信徒峰中修行会のお知らせ

本年の六月四日～五日に予定されております「信徒峰中修行会」につきましては、新型コロナウイルスの流行が未だ終息していない現状を鑑み、平常時とは異なる修行内容を検討しております。

実施日程及び修行内容等の詳細につきましては、現在山内において、感染対策を踏まえながら協議しております。

ご参加をお考え頂いている皆様には、ご迷惑をお掛け致しますが、ご理解頂きますようお願い申し上げます。

尚、日程や詳細等につきましては、高尾山報の五月号、また、薬王院ホームページにて発表させていただきます。

高尾山信徒峰中修行会係

☎〇四二-六六一-一一一五

**高尾山報助成金志納者**

**御芳名(順不同・敬称略)**

相模原市　五味　恵美子
〃　小野沢　波枝
練馬区　稲毛　英子
江東区　掛川　昌通
邑楽郡　松村　静雄
茅ヶ崎市　岡本　イネ子
港区　吉田　貴喜
北区　清水　音二
東筑摩郡　竹内　政男
小平市　関　道雄
富里市　森　照森
所沢市　野村　綱二
八千代市　稲越　眞
八王子市　吉田　喜平
八王子市　石田　貞夫
小金井市　小澤　靖江
秩父市　上原　幸江
深谷市　中澤　裕一
富士宮市　沖山　康子
新座市　彰山　粧麗
宮崎市　田﨑　博俊
相模原市　金田　桜佳
町田市　小川　恭史
三島市　日吉　佳代子
藤岡市　吉田　菊次郎
八王子市　峰尾　勝治
〃　おぐら葬祭㈱
アットイーズ
世田谷区　水田　文敏
相模原市　華蔵院
世田谷区　上田　浩憲
八王子市　髙橋　秀男
東近江市　森島　照光
浜松市　竹内　恒央
高知市　坂本　敬子
柏市　北上　とも
八王子市　天野　章雄
〃　鵜野澤　信之
北区　代田　正俊
中央区　玉井　大司
調布市　金井　英之
高尾山健康登山者一同

## 高尾山内八十八大師巡拝のご案内

二つのグループに分け、途中（山上十一丁目茶屋前第十七番札所）で合流し、一緒に巡拝致します。

A、不動院から琵琶滝を経由して薬王院まで歩く

B、ケーブルカーを利用する

（琵琶滝周辺のお大師様は巡拝できません。また、ケーブル代金は自己負担になります。）

**日程**　五月十日（火）

**行程**　山麓不動院→琵琶滝→仏舎利塔→本堂（護摩修行）→坊入（昼食）→下山（一号路）→不動院着（法楽）

**参加費**　五千円（昼食代、保険料含む）

**集合場所**　山麓不動院（八時半集合）

**申込方法**　ハガキに郵便番号、住所、氏名、生年月日、性別、電話番号を明記の上、左記までお申込み下さい。

＊また、ホームページからお申込みすることもできます。下記のQRコードよりアクセスして頂き、必要事項をフォームに入力して下さい。

**締め切り**　四月三十日（土）

〒一九三―八六八六
八王子市高尾町二一七七
大本山高尾山薬王院　八十八大師係

＊申し込み締切り後、請書（行程表・持ち物等）をお送り致します。

＊尚、新型コロナウィルス感染症の状況により行程等に変更がある場合があります。

# 登山だより

■五月行事日程■

**一日～七日**
聖天秘供（聖天堂）
**四日、十六日、二十八日**
弁天様御縁日
**八日**
仏舎利詣り（仏舎利塔）
**九日、二十三日**
御詠歌勉強会
（十時山麓不動院）
**十八日**
高尾山天狗まつり
**二十八日**
月例写経会
（十三時山麓不動院）
**二十九日**
高尾山とんとんむかし
「語り部の会」
（十二時半山麓不動院）
**二十一日**
飯縄様御縁日
神徳報謝百味飲食供
（九時大本堂）
**二十八日**
奥の院開扉供養
（十時奥之院）

**☆神徳報謝百味飲食供**
高尾山御本尊飯縄大権現様の日々の御加護に感謝し、沢山の御供物を捧げて御本尊様威光倍増の為、御供養申し上げる法要です。
皆様の御志納を受け付けておりますので、ご希望の方は大本堂までお申し出下さい。
尚、法要終了後に百味のお札を授与致します。
**毎月二十一日午前九時勤修**
**御志納金　一口三千円以上**

**毎日のお護摩奉修時間**
（4月15日～10月31日まで）
午前5時30分
〃　9時30分
〃　11時00分

午後0時30分
〃　2時00分
〃　3時30分
ご講中・団体等御相談下さい。

# 晋山記念 特別開帳大護摩供奉修

佐藤秀仁貫首の晋山を記念し、特別開帳大護摩供法要を左記の日程に於いて奉修致します。
開山以来、壱千弐百有余年という連綿たる歴史の中で、今日新たな貫首が晋山されるという尊い御勝縁を祝し、仏法興隆・万国和平・国土安穏・講中繁栄・信徒安全をご祈願致しますので、十方有縁檀信徒各位の御来山を、心よりお待ち申し上げます。
尚、御檀家様、各御講中、篤信者には予めご案内状をご送付させて頂きます。

**【日程】**
五月　七日（土）
十三日（金）
十四日（土）
二十日（金）
二十一日（土）

## 高尾山報助成金 御志納のお願い

当山では、大護摩修行等により御縁を結ばれた御信徒様に高尾山報を送っております。
引き続いてご愛読されますよう、皆様方の助成金御志納をお願い申し上げます。

発行所
東京都八王子市高尾町2177
大本山
高尾山薬王院
郵便番号　193-8686
電話(042)-661-1115(代)
FAX(042)-664-1199
発行人　菅谷秀文
編集人　菅井倫浩
印刷　ヒラツカ印刷社
毎月1回1日発行
1部50円

下記のQRコードから高尾山薬王院のホームページにアクセスできます

高尾山薬王院ホームページ
https://www.takaosan.or.jp